



# 通信



VOL.34

令和5年1月22日

作成：長岡正宏

合気道は必ず人類にとって役に立ちます！ by Nagaoka

## 道心探求

合気道の「技」は非常に理にかなっていると思う。しかし、そう思えるようになったのは、つい最近のことである。合気道を始めたころは、多くの矛盾を感じながら稽古していた。例えば、力一杯上から抑えつけられた腕を上げるには、力でしかなかった。「合気道は、力がいらぬ」というのは、嘘だと思っただ。それでも、稽古を続けた。そして、たくさんの助言を頂いた。助言してくれた人は、数えきれない。「しっかりと持たれる前にさげけ」「もっと踏ん張れ」「気を入れろ」「合わせろ」など様々であったが、どれも良く分からなかった。合気道の書籍も読み込んだ。とはいっても、合気道の書籍は今のようによくはなかった。当然、インターネットは全く動画を見ることは容易なことではなかった。

そんな中でも、あまり力を感じさせない合気道を見せている人は、若干名おられた。そのような人は確かに上手い。しかも、動きが綺麗だった。教えて頂いても出来ないし、真似ることなどできなかつた。いや、どちらかと言えばほとんど教えてもらえなかった。「技は盗み取れ」「見て覚えろ」という時代だった。

加藤弘師範は、「武道は教えてもらおうものじゃない、自分で見つけるものだ」と、いつも仰っており私の耳から離れることはなかった。それは、もう自分で考えていくしかなかった。

中国の高僧臨濟禪師は、「但莫外求(ただ外に求めること莫れ)」と喝破した。仏道修行も同じなのかもしれない。兎に角、身近に合気道を教えてくれる人がいなかったら、私は絶えず自分の体に質問して答えを求めた。その繰り返しだった。そして、道場稽古はその成果を試す場であった。自分自身を信じていれば、決して裏切られることはなかった。

## ○△□への道



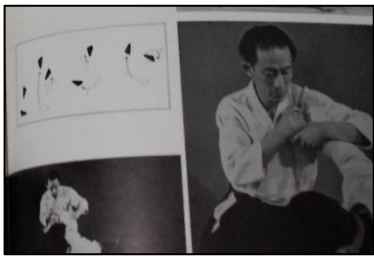
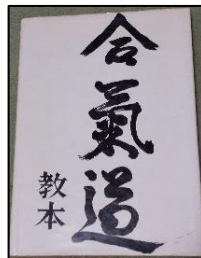
昨年、サッカーW杯カタール大会で日本代表が強国相手に素晴らしい試合を見せてくれた。上の写真は対スペイン戦での堂安律選手の同点弾だ。スペインGKシモンの手を出すタイミングは合っていたが、ボールは僅かに上を通り過ぎた。それは数センチの差だっただろう。この時、シモンは上下に飛び跳ねて様子を見ていた。いわゆる、フットワークをしている。堂安がシュートを放つを見て、着地してダイビングキャッチを試みた。二枚目の写真はシモンが着地しようとする瞬間だ。ワイドスタンスで着地している。こうなると倒れながら右足で地面を蹴って体を横方向へ持っていくことになる。したがって、上へは飛べなくなるのだ。もし、この時シモンがもう少し面を蹴って高く飛び堂安のシュートを防いでいたかもしれない。元スペイン代表の解説者はGKシモンのミスだと指摘されていた。スタンスの取り方で勝負が決まった試合だった。

VOL.27の「意識を前面に出してはいけない」と指摘した。何故なのかお分かりだろう。意識を前面に出すと攻撃的になり前への動きと繋がるからである。すると、無意識のうちにワイドスタンスになっているだろう。ワイドスタンスで合気道をされている人は攻撃的だ。

## 合気の図書

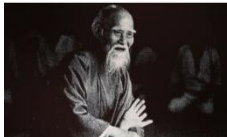
しかし、私はいつも言っている「相手へ向かって行くな」と。だから、スタンスが大きくなることはほとんどない。逆に、ワイドスタンスにしないから、相手へ向かっていくことはない。だから、意識を前面に出す必要もない。私の「入身」をご覧いただきたい。スタンスは広いが、どこの誰よりも早く「入身」へ入っているのが分かるだろうか。

ワイドスタンスだと次の動作を大きくしないと動けない。自身の重心移動距離が長くなるからだ。大きく動こうとすれば、相手に悟られるのは必然だ。隙もできやすい。小さく動いて、相手を大きく崩すことを考えた方が良いだろう。「やり方」より、まずは「あり方」を考えて欲しい。



昭和38年に出版された「合気道教本」だ。私が合気道を始めた頃週一回の師範稽古以外は、教えてくれる人はいないし、稽古相手もいなかった。部屋に置いてあったこの教本が、私の師だった。分かるようにで分りにくい連続写真や運足図には悩まされた。しかし、唯一の情報源でもあった。合気道をする環境がまともを整っていなかったお陰で、私に考える力を授けてくれたと思っている。忘れられない一冊だ。やる気さえあれば環境は関係ない。

## ～ 開祖の言葉 ～



勝ったり負けたりというようなことを言う時代ではなくなっているのではないのか。大愛の時代が来るとるんじゃよ。